社会党社労委、現地を調査

患者、家族と交流
全力あげて闘うと決意

六月十日、十二日の二日間、藤田参議院議員（CO特別委員長）を団長とする国会議員十名、井上社会党国会共闘事務局長ら三名計十三名は、CO患者実態調査のため現地に入った。

調査団はA、B班に分れ、A班（山本社労委員長、藤原、大橋以上参議、山本政、田迎、島本以上衆議）は熊本医大入院患者の実態を調査、B班（藤田CO特別委員長（参議）河野、多賀谷、細谷以上衆議）は、大牟田労災療養所、天領病院、万田回復訓練所を調査B班は十日、A班は十一日それぞれCO家族との懇談会を行なった。

九州炭労傘下からも高島、日炭転、大辻、立川、高松労の幹部の参加を得、患者、家族の訴えを聴き、今国会に提案されたCO特別立法制定のため、全力を挙げてたたかうことを決意しあった。

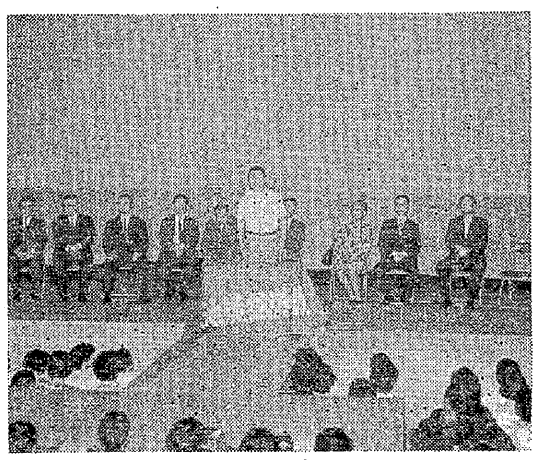
『解雇制限』『前収補償』は結論出ず

四十一年六月通常国会の幕切れ寸前、自民党政府、社会党間で取り交された覚書にもとづき、本年六月国会では政府案、審議の段階になっている。こうした情況のなかで社会党社労委は三池CO患者の実態調査を行なうことにより、患者、家族の具体的要求を法案に盛り込むため現地調査となったのである。しかし、十日閣議を経て提案された特別立法の内容をみると、患者ならびに家族の悲願である「解雇制限」「前収補償」については一考だにされず、骨抜法案として提案され、今後の院内におけるたたかいは、決して楽観は許されない状態となってきた。

完全立法制安が事故の責任追及である

宮川組合長は調査団を前に訴えた。

「四百五十八名の同志を殺し、八百名ぉものガス患者を生んだ三井の責任はのがれない。政府の責任はまぬがれない。前収補償、解雇制限を立法の中に盛ることが、四百五十八名の犠牲者とCO患者、家族に対するせめてものつぐないであり、三井独占と政府に対する責任追及である」調査団は、この訴えを基本として法審議に際しては十分考えるし、そのこと抜きには法案成立はないと強く決意表明を行なった。



家族・組合員を前に決意を表明する社会党代表団

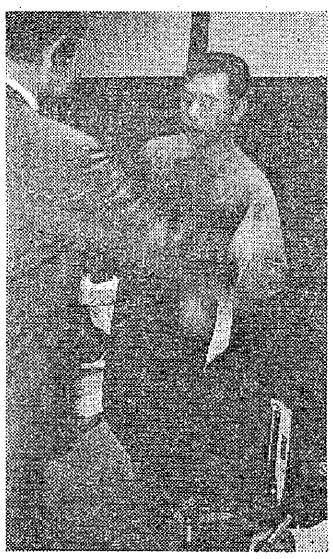
九割が自覚症状
転場に帰っても治らない
新労、職員、組夫を調査

大牟田労災療養所と熊本大学は三川鉱大爆発によるCO患者のうち被災直後から今年の三月までの間に転場復帰をした（させられた?）人たちの健康状態を四月末から調べていたが、その結果を発表した。

調査をうけた人は、新労組合員百九十一人、転組四十二人、組夫二十五人である。

この結果、自覚症状では約九〇%の人たちが頭痛、頭が重い、物忘れ、疲れやすい、いらいら、不眠などを訴えており、とくに頭痛物忘れ、疲れやすいなどの訴えが多く、頭痛は新労組二九%、転組三三%、組夫三二%が訴えている。

また、物忘れは新労組一六%、転組二六%、組夫三二%が訴えており、疲れやすいは新労組一四%転組二二%、組夫二〇%となっている。



健康をとりもどすため
CO患者は一生懸命

自覚症状が一番多かったのは組夫だった。

このほか不活発、忍耐力の低下などの精神症状、記憶力の減退や思考力の低下などの機能障害が約半数の人に観察されたほか、汗が出る、手足が冷たいなどの神経症状も約三分の一の人たちに認められている。（六月十三日付朝日新聞より）

治っていないことを証明

この調査はなによりも雄弁に、CO中毒が新労組員、転組、組夫をとわず治っていないことをよくあらわしている。

とくに、頭痛や、いらいら、物忘れなどのひどい人が坑内作業をさせられていることが、いかに危険なことであるかはいうまでもない。

とくに、CO中毒はノイローゼであり、環境が変れば治るといった無責任な一部の御用医者への明確な反証でもある。

われわれは「あくまでも病人の治療は完全にすること、解雇は停年までしないこと、前収を補償すること」を要求してたたかおう。

「根性ものがたり」（9）
〝脅迫には負けんバイ〟
―ボクシングできたえた腕と心―
四山　桑野幸男さん

九州チャンピオンも

最近日本はプロボクシングで最多タイトル保有国になったそうだが、三池労組にもボクシングに縁がある闘う労仂者がいる。

四山支部の桑野幸男さん（三十八才）は戦後まもなくの二十二年からボクシングをはじめた。十八才のときである。

戦後の混乱期に護身用として習いはじめたものであったが、大いにウデをあげ県の国体選手となり昭和二十五年にはフライ級九州チャンピオン、福岡県チャンピオンにまでなった。

いまでも大牟田にある山中ジムのコーチであり、福岡県アマチュアボクシング連盟の常任理事と日本アマチュアボクシング連盟の公認審判員と肩書きはいかめしい。

フライ級という軽量クラスであることと、温厚な桑野さんの顔立ちから、会社の人も転場の人も、桑野さんのそのようなスポーツ歴に気付く人は少ないという。

当り前がなぜ悪い?

桑野さんはいま両親が住む明治町の実家に同居中であるが、四山社宅からここに引き上げてきた直後、会社側は人事を派遣して説得にかかった。

直接的に説得できないと知ると奥さんの里にまで来て説得をつづけたが、いまではあきらめたのかさっぱり来ない。

「この世の中は少々おかしなもので、私が三池労組にいれば一風変ったことをしているようにみている。別に私には特別に決心だとか信念などというものはなにもない。ただ前から三池労組の組合員だったのでいるだけなのに、どうしてそんなに説得しなければならないのかわからんですね。脱落する人たちは〝行きすぎだ〟などというが、それは人間が作った組合だからいろいろ欠点はあるでしょう。欠点があれば執行部に話せばいいのに、それもしないで脱落するのは、一種のいいわけにしかすぎないと思います。いまの執行部は昔とちがってそういう批判は受け入れると思いますがね」

「私はあまり先頭に立っていう方ではない。それでいいと思います。先頭に立ってガンガンいいよった人の方が真先きに脱落しましたからね」

子どもたちの成長が…

桑野さんの夢は五年生の娘さんと一年生の息子さんの成長である「『偉い人』になってもらいたいとは思いません。『偉い人』には悪い奴でもなれる。本当に人間らしい人間、立派な一人前の人間になってもらいたいですね」

桑野さんは最後にこう結んだ。

「私はこの子に偉くなれとはいわない」と桑野さんは語る

展望をもって闘いましょう

住友鋼管　田之上鉄男

拝啓　お変りありませんか。私は相変らずです。

先日はお便り有りがとうお元気で頑張っていらっしゃるごようす何よりです。

私もきびしい状況ではありますが、ぼつぼつ頑張っています。

転場に〝まなぶ友の会〟もつくりました。私たちがいまもっとも重点的にとりくまなければならないことは、もののいえる人間、労仂者としての自覚をもった仲間を多くつくるということだと思います。

いろいろ苦しいことも多いですが展望をもってたたかいましょう。

先日、CO患者を守るための署名とカンパを行ないました。準備不足で十分な成果はありませんでしたが、それでも百二十名の署名と四千円のカンパを集めることができました。

これからも、社青同が提唱している、九の日行動で、三池の仲間とともにたたかいたいと思います。

十月には結婚しますが、その前に彼女の家（福岡県飯塚の炭鉱の娘さん）行きますので、できたら三池にも寄りたいと思います。

彼女も「石蕗の花が咲きました」を読んでとても感激していました。

それではまたのちほどお便りします。乱筆乱文ですみません。

奥さんと子どもさんによろしく

昭和四十二年六月八日　田之上

高槙さま

ヤブ蚊が多いのに
カヤも使わせない
大牟田労災病院

労災病院で六十名にものぼるガス患者に治療も投薬も、はては給食さえストップされて以来、すでに五ケ月がすぎようとしている。

毎日、給食センターの弁当で病人食とは縁遠い食事をしている入院患者の間には、さすがに胃腸障害が続出し、すでにCO中毒の治療以前の問題がでている。

「いくら腹がすいても毎日同じ弁当をみていると、一寸口にしただけで食欲がなくなる」「朝食の冷たくなったミソ汁はうまくない金属製の弁当箱につめられたメシに卵をかけて半分だけ食べる」と患者たちは語っている。

もう暑いので、それでなくても寝苦しい夜なのに、病院側は〝もう労災補償を打ち切られた人たちなのだから〟という理由でカヤを使わせない。

「いくら殺虫剤をまいても一晩中窓をメ切っていてはとてもねむれないし、開ければ蚊にくわれるし、いてもたってもおれない」という。

この六十名は、労仂省から労災補償を打ち切られていない二十二名の人たちと一緒に入院しておりその人たちだけはカヤを支給される。

このあきらかな差別とり扱いと蚊のくうにまかせ治ってもいない患者に一方的に退院を強制するというのは、まさに医者の仮面をかぶった吸血鬼のすることではないか。

もし、CO中毒患者の中に日本脳炎にかかる人でも出現すれば…政府と三井のあまりにもきたない人間マツ殺のやり方なのである